

専門を極める～人にわかるように説明できますか？～

Be Specialist! Can You Explain Yourself ?

岩田忠久 Tadahisa IWATA

もう7～8年は前になるだろうか。高分子学会が主催する「若手社員のための高分子基礎講座」で社会人の方々に「上手なプレゼンテーションの仕方」なる講義を数年やったことを思い出した。最近よく頼まれるのが、私の経歴からキャリア講演会での講師である。キャリアアップには何が必要かとよく質問されるが、そのたびに、本稿のタイトルである「専門を極めること」と「人にわかるように説明すること」の2点で、「ここからスタート」と答えている。

「専門を極める」と「人にわかるように説明する」は、一見相反しているような事柄であるが、実は非常に密接に関係があり、研究者が進路を選択するあるいは高いモチベーションを保ちながら研究や仕事に打ち込む上で、最も大切なことだと私は思っている。よく、「いい研究をすれば、必ずポストは見つかる」と上の先生方は言われるが、「いい研究をし（専門を極め）、人にわかるように説明できれば、必ずポストは見つかる」と私は付け加えたい。

研究者は自らの専門を極め、真理の追究と社会への貢献を実現しなければならない。しかし、時として専門を追求するがゆえに、自らの城に閉じこもり、同じ研究領域の人とのみ付き合い、専門用語に囲まれた暗号のような会話をし、刻々と掲載される学術論文におびえる日々を過ごすことになりかねない。就職活動を頑張っている学生諸君、キャリアアップを目指し日々研究に邁進している博士研究員の方々、今の自分の環境を変えようともがいている若手研究者の皆さん、今一度自分を見つめ直してみましょう。

私が言うところの「人にわかるように説明する」とは、

- ・専門外の人もいるところで、
- ・サイエンスのにおいを消さないように、
- ・なるべく平易な言葉で、
- ・限られた時間で、
- ・一回で理解してもらえるように、
- ・魅力的な夢も含めて、

自分の研究内容を説明することである。

ここでの「時間」を「分量」に、「一回」を「一読」

に変えれば、「人にわかるように説明する」とことと「人にわかるように書く」ということは同じことである。この二つが最も必要とされるのが、就職活動と競争的予算獲得のときなどで、大いにその能力が問われるところである。

では、どうすれば良いか？ それは自分の専門、自分の武器を明確にすることである。実は大抵の人は、自分の得意分野は何なのか、誰にも負けないものは何か、などの自己分析ができていないのである。専門外の人には、難しいことや細部についてはよくわからないので、「人にわかるように説明できない」ということは、自分自身の研究を本当は理解していないのだ、と解釈してしまう。難しいことを、難しい言葉で説明するのは、アホでもできる。専門が極められると、自分自身に余裕が生まれ、噛み砕いてわかりやすく説明できるようになるのである。

私は、自分の書いた文章や講演スライドを必ず人に見てもらおう。誰に読んでもらうかといえば妻であり、誰に聞いてもらおうかといえば子供達を含めた家族である。そういう意味では、私は「仕事と私事」がかなり近いところにあるのかもしれない。冗談のように聞こえるが、昔採択された科研費若手Aの申請書は、妻の出産時に手伝いに来てくれていた義理の母に見てもらった。字が小さくて読みにくいのか、行間が詰まって圧迫感はないか、義理の母を年配の審査員に見立て、この点にも注意を払ったことを覚えている。

最終的に自分を評価してくれるのは、同じ専門分野の人達だけではなく、はるかに多い専門外の人達である。妻、夫、恋人、両親は、このはるかに多い専門外の人達であるとともに、最も皆さんを大切に思ってくれている人達である。人に見せるとなると、締切よりかなり前に一度仕上げなければならない。完成したと思ったものでも、時間を置いて再度見直してみると、多くの粗が見えてくる。何度も推敲を重ねれば、必ず完成度もぐっと上がる。さらに、夫婦、子供、恋人との会話も増え、仕事だけでなく、私事も充実してくるはずである（たぶん）。

さあ、恥ずかしがらずに、さっそく今日、誰かに5分で自分の研究を説明してみませんか？



岩田忠久 Tadahisa IWATA

東京大学大学院農学生命科学研究科・准教授
博士（農学）
1994年、京都大学大学院農学研究科林産工学専攻博士
後期課程単位取得認定退学、京都大学博士（農学）。
1995年、日本学術振興会PD特別研究員、理化学研究

所基礎科学特別研究員。1996年、理化学研究所研究員。
2001年、同副主任研究員。2006年、東京大学大学院農
学生命科学研究科助教授。2007年より現職
専門は高分子材料学、高分子構造、環境循環型高分子
E-mail: atiwata@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp